

目 次

発刊にあたって

館 沿 革	1
館 日 誌	2
1. 施設・設備	3
2. 事 業	4
①展 示	4
②展示の概略	7
③企画展	8
④資料収集活動	9
⑤新収蔵資料	10
3. 教育普及活動	10
①社団法人「アイ・オー・イー」勾玉づくり体験教室	10
②町内4校合同宿泊学習 勾玉づくり体験教室	10
③町内3校合同宿泊学習 勾玉づくり体験教室	11
④夏休み企画「昔の遊び道具づくりと勾玉づくり体験教室」	11
⑤図書館との合同企画「紙芝居とブンブンゴマづくり体験教室」	12
⑥上中焼野集落子供会 勾玉づくり体験教室	13
4. 入館者数	13
5. 郷土館の組織	14
6. 研究論文	15
県指定文化財「南種子町のインギー鶏」 南種子町文化財保護審議委員 寺内安弘	15

南種子町郷土館の沿革

昭和44年 2月28日：町立博物館設置準備委員を委嘱

昭和44年 3月 7日：第1回町立博物館設置準備委員会

昭和44年 3月25日：資料収集協力員と準備委員との合同会

昭和44年 4月14日：第2回町立博物館設置準備委員会

昭和44年 5月16日：第3回町立博物館設置準備委員会

昭和44年 6月 7日：第4回町立博物館設置準備委員会

昭和44年 9月13日：第5回町立博物館設置準備委員会

昭和44年11月 1日：旧ユースホステルの1室を使用し、「南種子町立南島民俗博物館」
として開館。

昭和44年11月17日：第6回町立博物館設置準備委員会（最終）

昭和 年 月 日：南島民俗博物館の改修工事

昭和61年 3月 5日：「南種子郷土館」として開館

平成19年 2月 1日：旧郷土館の老朽化に伴い、旧公立種子島病院跡に一時移転して
開館

平成21年 4月30日：広田遺跡展示室改修工事

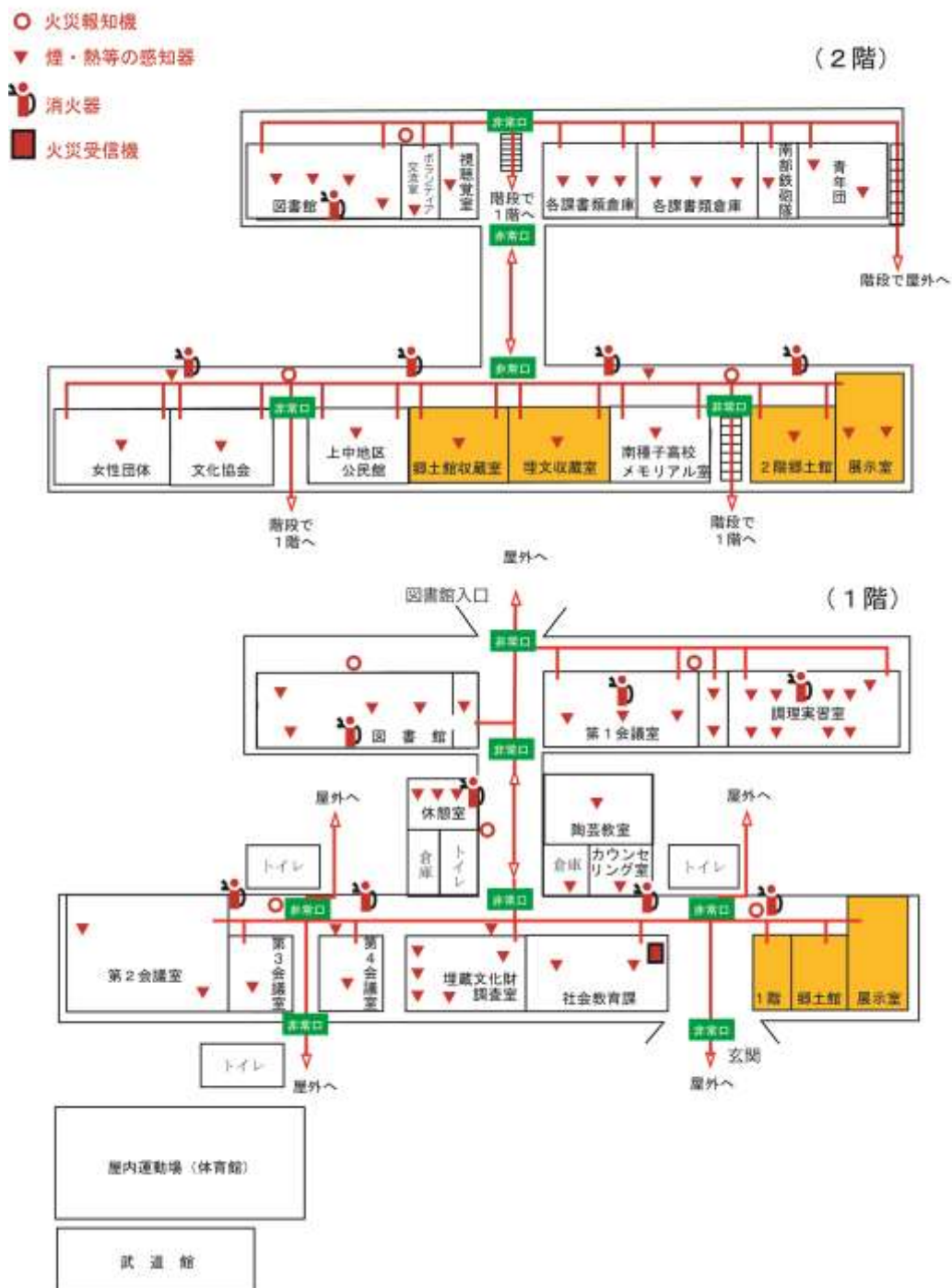
平成24年 4月 1日：社会教育課とともに、旧南種子高校跡に移転して開館

館日誌

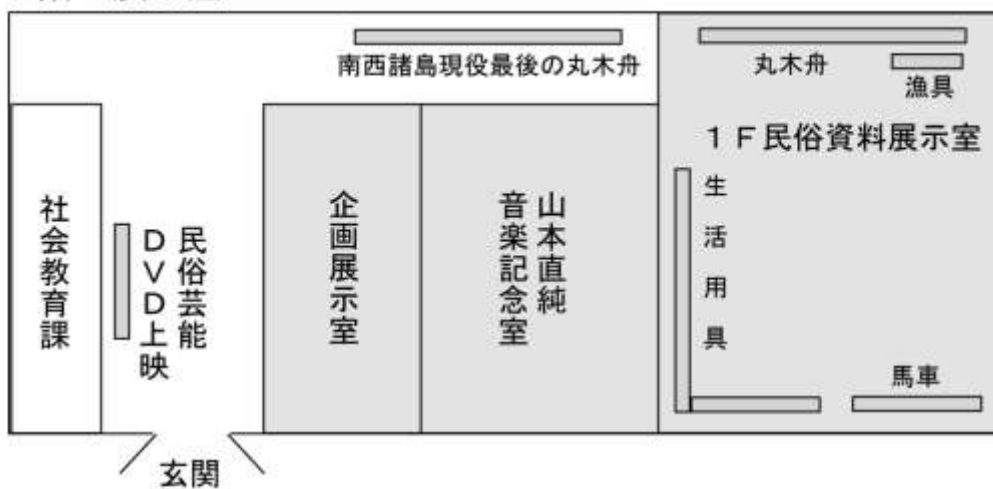
- H25.
- 4. 5 勾玉づくり体験教室（社団法人「アイ・オー・イー」より依頼）
 - 4. 8 インギーの入校式（花峰小学校）
 - 5. 17 南種子町文化財保護審議委員会
 - 5. 21 企画展「県指定記念～インギー鶏展」開催（6月30日まで）
 - 5. 23 勾玉づくり体験教室（4校合同宿泊学習より依頼）
大川小・長谷小・平山小・花峰小
 - 5. 29 島間小学校来館
 - 5. 30 勾玉づくり体験教室（3校合同宿泊学習より依頼）
島間小・西野小・茎南小
 - 6. 22 インギー鶏の学習会（インギー鶏育種会）
 - 6. 28 熊毛地区文化財保護審議委員会（西之表市）
 - 7. 10 郷土館寄贈資料の受入（池亀次善氏）
木製ジオラマ（6）内2点は赤米館で展示
 - 7. 21 夏休み企画「勾玉づくり体験教室」（8月31日まで）
 - 8. 1 企画展「ジオラマで見る昔の暮らし展」開催（8月30日まで）
 - 8. 24 図書館との合同企画「紙芝居とブンブンゴマづくり教室！」開催
 - 9. 10 郷土館寄贈資料の受入（重信文夫氏）
ワキ鋸（1）・改良刃鋸（1）
 - 9. 25 郷土館寄託資料の受入（川口 格氏）
無線機の箱（1）・模造軍刀（1）・拳銃ケース（1）・軍票（3）
大東亜戦争従軍記章模造品（1）・航空機工場の写真（1）
 - 11. 1 企画展「ウミガメ展」（12月27日まで）
 - 11. 16 上中焼野集落子ども会「勾玉づくり」体験教室
 - 11. 22 長谷小学校来館
 - 11. 27 「唄おう・聞こう・広げよう 民謡大会」開催
 - 12. 3 郷土館寄贈資料の受入（川口 格氏）
拳銃ケース（1）・軍票（3）・大東亜戦争従軍記章（1）
- H26.
- 1. 10 県指定文化財「南種子町のインギー鶏」看板設置（寺内昭徳氏鶏舎）
 - 1. 27 文化財保護審議委員会及び郷土館管理委員会

1. 施設の防火設備及び避難経路

■南種子町郷土館及び中央公民館の防火設備及び避難経路



1階 展示室



民俗展示室（生活用具）



山本直純音楽記念室

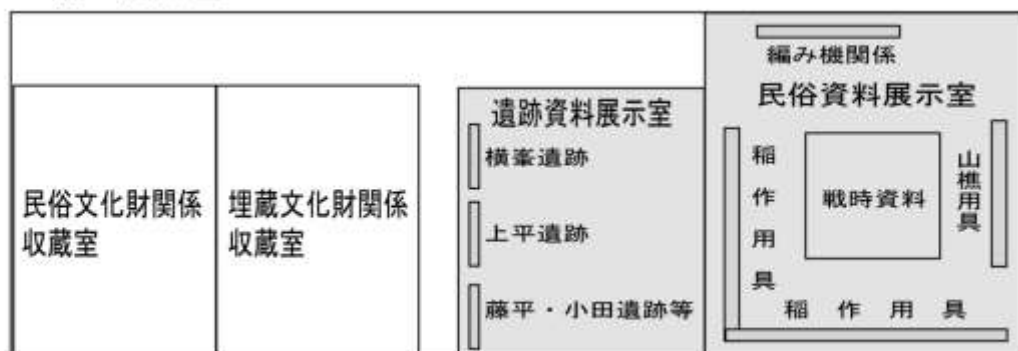


企画展示室（新収蔵品展）



1階廊下（南西諸島現役最後の丸木舟）

2階 展示室



2階遺跡資料展示室（戦時資料）



2階民俗展示室（戦時資料）

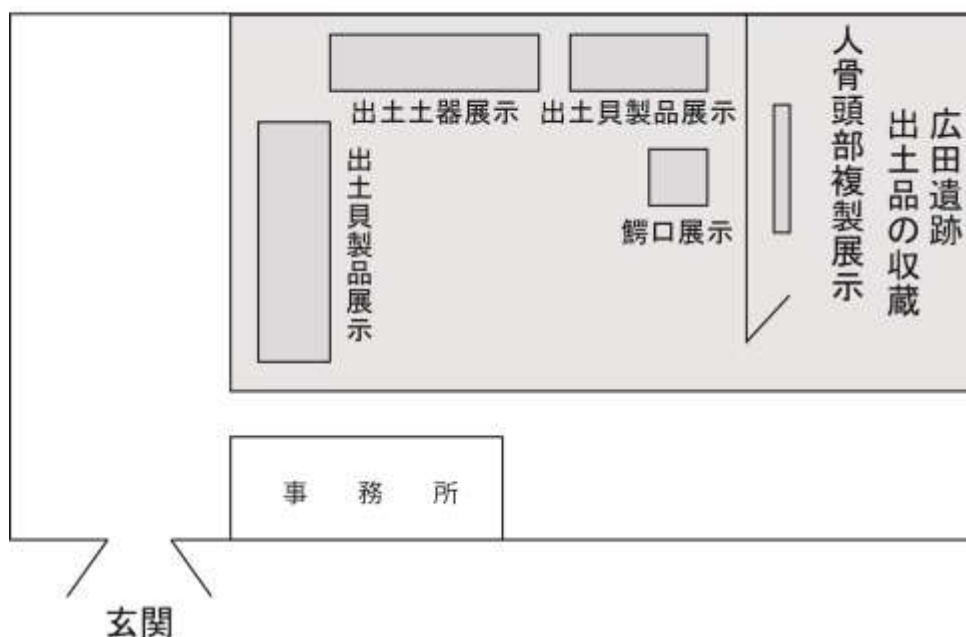


2階民俗展示室（稲作用具）

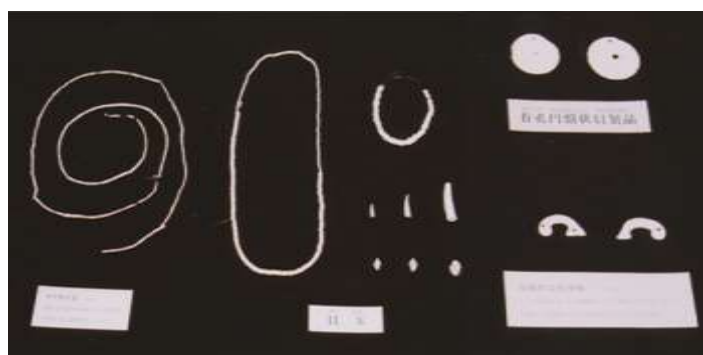


2階民俗展示室（山樵用具）

別館（旧郷土館） 広田遺跡展示室



展示風景



貝製品の展示

②展示の概略

■民俗展示室（1階）

住まいに関する生活用具を中心に展示。

壁面や空スペースを利用して、丸木舟や馬車などの大型資料も展示しています。丸木舟（刳舟）については、通常のもの、隣接する廊下に南西諸島において現役で最後まで使用していた丸木舟（牛野春芳氏寄贈）とを比較展示することで、それぞれの歴史や生活感の違いを感じて欲しいとのねらいがあります。

■山本直純記念室（1階）

山本直純氏愛用の楽器・オーディオ機器・レコード・盾・賞状などの寄贈品を展示。また、山本直純氏との交流のきっかけとなったイベント「トンミーフェスティバル」についてもパネルで紹介しています。

■企画展示室（1階）

今年度は、昨年度寄贈された資料を「新収蔵資料展」として開催。

■民俗展示室（2階）

稲作用具を中心とする農具や山で使用する山樵用具等を展示。

また、展示スペースの問題で、軍服・勲章・遺書などの戦時資料等も、同室に展示しています。

■遺跡展示室（2階）

広田遺跡以外の遺跡資料を展示。現在は横峯遺跡、上平遺跡、藤平・小田遺跡を中心に展示しています。（新たな遺跡が発掘されしだい、展示を入れ替えていく予定です。）

■広田遺跡展示室（旧郷土館）

平成24年3月末、南種子町中央公民館（旧南種子高等学校跡地）に郷土館を移転。施設整備がまだ不十分なため、広田遺跡関係の資料は、旧郷土館で展示を行っています。

③企画展

■企画展「県指定記念！ インギー鶏展」(平成25年5月21日～6月30日)



平成25年4月23日、南種子町のインギー鶏が県の文化財に指定された事を記念して、企画展を開催。今回の企画展では、インギー鶏の特徴やその学術的な価値を示したパネルに加え、インギー鶏に係わる歴史的背景も展示し、県の文化財としての価値を示しました。

インギー鶏に係わる歴史的背景資料として、「ドラメルタン号の船員たちの手書き名刺とお礼の手紙」「船員たちのお世話をされた才川周衛門(庄屋)の日記と船員たちのために買い揃えた日用品や食料品などの買入帳簿」「船員たちが使用した鉄鍋・カナヅチ」などを借用して展示しました。 ***来館者138名(幼児：5名・小学生：61名・一般：72名)**

■企画展「ジオラマで見る昔の人々の暮らし展」(平成25年8月1日～8月31日)



平成25年7月10日、池亀次善氏から「砂糖すめ」や「屋根の藁葺き」などの昔の人々の暮らしの様子を再現した木製のジオラマを寄贈していただきました。もうすぐ夏休みということで、このすばらしいジオラマをたくさんの皆さんにご覧になっていただき、昔なつかしい人々の暮らしを体感していただけたらと、企画展を開催。

ジオラマは、人々の表情や作業の様子が細部に至るまで表現されており、当時の人々の笑い声や労働歌、掛け声などが聞こえてきそうである。来館者からも、写真よりもこうした模型の方がわかりやすいと好評だった。

また、併せて昭和38年当時のオーギ(砂糖キビ)切りや田植などのビデオを放映することで、より当時の人々の暮らしを体感できたのではないかと思います。

***来館者126名(幼児：16名・小学生：28名
大学生：1名・一般：81名)**



■企画展「ウミガメ展」(平成25年11月1日～12月27日)



剥製は赤米館から借用



岩坪陸雄さん提供資料



種子島は、アカウミガメの産卵が第2位(屋久島が1位)という全国でも有数の産卵地です。しかし、捕獲や生息環境の悪化などによって年々減少しており、国際自然保護連合の絶滅危惧種になっています。

1999年～2010年まで、町のウミガメ保護監視員として、ウミガメの保護に努めて来られた岩坪陸男さんの調査資料や観察日誌等を基に、企画展を開催しました。

身近でありながら、以外と知られていないその生態などを陸ガメとの比較やクイズ方式でわかりやすく解説しました。

また、中種子町のウミガメ保護監視員の笹川二成さんからは貴重なウミガメの写真や産卵状況調査の資料を、MBCふるさと特派員の番山喜一郎さんからは産卵シーンのビデオを提供していただき、視覚や聴覚を通して、より体感することができたと思います。

来館者からは、「知らないことがたくさんあって、勉強になりました」という声が聞かれま

番山さん提供ビデオ・笹川さん提供写真と資料

＊来館者：126名(幼児：11名・小学生：16名
中学生：1名・高校生：1名・一般：97名)

④資料収集活動

今後も町の広報紙での呼びかけや文化財保護審議委員会からの情報提供をお願いしながら、資料の収集活動を行っていきます。

⑤新収蔵資料（平成25年度）

提 供 者	住 所	資 料 名（個数）
池亀 次善	上 中	木製ジオラマ「普請」・「屋根の藁葺き」・「砂糖すめ」 「家」・「田植」・「水稻の収穫」（計6）
重信 文夫	西 海	ワキ鋸（1）・改良刃鋸（1）
川口 格	中種子	大東亜戦争従軍記章の模造品（1） 九四式拳銃囊ケース（1） 軍用手票（1）

3. 教育普及活動

①社団法人「アイ・オー・イー」 勾玉づくり体験（平成25年4月5日）

平成25年4月5日、南種子町中央公民館第2会議室において、社団法人「アイ・オー・イー」主催の勾玉作り体験学習の講師として、製作の指導を行いました。ほとんどが小学生で、今回初めて作ったという子どもたちもいて、削るのにとっても苦戦していましたが、なんとか時間内に仕上げる事ができ、皆さん喜んでおられました。

***参加者23名（小学生：17名・高校生：1名・大学生：2名・引率：3名）**



②町内4校合同宿泊学習 勾玉づくり体験（平成25年5月23日）

平成25年5月23日、大川小・平山小・花峰小・長谷小学校の町内4校合同宿泊学習の中で、勾玉づくり体験学習の講師として、製作の指導を行いました。当初、1時間半の予定でしたが、急遽1時間となり、慌しい製作となりました。提げヒモの結び方ができなかった人のために、結び方を図解したコピーをそれぞれ各学校に配布しました。



***参加者31名（小学生：23名・引率：8名）**

③町内3校合同宿泊学習 勾玉づくり体験（平成25年5月30日）

平成25年5月30日、前回の4校に続いて、茎南小・西野小・島間小学校の町内3校合同宿泊学習が行われ、同様に勾玉づくりの指導を行いました。今回は時間的に少し余裕があり、ヒモの結び方まで指導することができました。ヒモの結び方はなかなか難しいので、できなかった人のために、前回同様、学校にコピーを配布しました。



***参加者71名（小学生：60名・引率：11名）**

④夏休み企画「勾玉づくり教室」

（7月21日～8月31日）

今年は、図書館との合同企画で「ブンブンゴマづくり」の体験教室を行う計画でしたが、夏休みの体験教室としては勾玉づくりに絞って体験教室を開催しました。

親子や友達で訪れ、時々、口喧嘩もしながら、それぞれ自分だけのアクセサリーを作りました。

***参加者32名（幼児：7名・小学生：19名・一般：6名）**



⑤紙芝居とブンブンゴマづくり&遊び体験教室（8月29日）

8月29日、図書館との合同企画で、小学生を対象に紙芝居とブンブンゴマづくりの体験教室を開催しました。図書館との合同企画は今回が2回目となりました。

図書館との調整が難しく、今年も夏休み終盤での開催となりましたが、みんなで楽しく製作しました。その後、ブンブンゴマをまわす指導を行ったが、最初は上手くまわすことができて苦戦していましたが、最後の方は半数の人たちが上手くまわせるようになりました。

***参加者22名（小学生）**



⑥上中焼野集落子ども会 勾玉（竜佩）づくり体験（11月16日）

今年も平成25年11月16日、上中地区焼野集落子ども会の皆さんが青少年育成の日の恒例行事として、勾玉づくりの体験学習にられました。今回で3回目ということで、自分から積極的に製作を始め、だいぶ早く完成しました。（小学生：4名

***参加者11名（小学生：8名・中学生：2名・引率：1名）**



4. 入館者数

平成25年度 南種子町郷土館入館者数調査

（平成25年4月1日～平成26年3月31日）

分類	幼児	小学生	中学生	高校生	大学生	一般	計	町内	島内	島外
4月	1	27	1	1	2	11	43	15	0	28
5月	2	130	1	0	0	61	194	172	15	7
6月	5	21	0	0	0	51	77	67	6	4
7月	1	22	0	0	0	29	52	29	8	15
8月	16	50	0	0	1	83	150	56	5	89
9月	5	11	0	0	0	10	26	24	1	1
10月	2	5	0	0	0	5	12	10	0	2
11月	5	16	1	1	0	65	88	67	14	7
12月	6	0	0	0	0	32	38	28	6	4
1月	0	0	0	0	0	17	17	14	0	3
2月	3	51	0	0	0	51	105	93	5	7
3月	1	12	0	0	7	22	42	17	2	23
計	47	345	3	2	10	437	844	592	62	190

5. 郷土館の組織

■館長	高田健一郎（社会教育課長）
■文化係	石堂和博 小脇有希乃
■管理員	豊島 巧
■管理員（補）	羽生源志
■管理委員会委員長	羽生源志（文化財保護審議会委員長）
■管理委員会副委員長	長田 忠（文化財保護審議会副委員長）
■管理委員会委員	岩澤昭文（文化財保護審議会委員）
■管理委員会委員	寺内安弘（文化財保護審議会委員）
■管理委員会委員	平野性賢（文化財保護審議会委員）

6. 研究論文

県指定文化財「南種子町のインギー鶏」

南種子町文化財保護審議委員 寺内安弘

① 学術的価値

インギー鶏の最大の特徴は、尾骨はあるが、尾羽の全てが縮れて、ほっそりと長く垂れ下がっており、一見、尾がないように見えることである。

インギー鶏について最初に研究をされた方は下中真所出身の産婦人科医の森越功先生で、1970年（昭和45年）、中種子町の西病院で研修医の頃、寺内昭徳氏から鶏を借りて特質について研究し、種子島科学同好会創立20周年記念誌「種子島民俗第20号（昭和45年）」でその成果を発表している。



インギー鶏（オス）

鹿児島大学名誉教授の橋口勉氏は、昭和45年～50年にかけて南種子を十数回訪れ、また大学でも研究用に飼育をして、鶏の血液型ともいえる酵素タンパク質型などまで調査している。インギー鶏の最大の特徴は、尾骨・尾羽の数は一般的な鶏と同等であるが、尾羽はその全てが縮れ、薄く長いほっそりした軸を有するため、尾がないように見える点であるという。橋口先生はインギー鶏のルーツを探るため、イギリス本国をはじめとしてドラメルタン号の寄港地などで調査を行い、中国広東省の南部にそっくりの家禽を見つけたが酵素タンパク質型もインギー鶏とは一致せず、インギー鶏は世界に1品種であると、イギリスの国際家禽学会誌で発表された。

県文化財保護審議会委員の鮫島正道氏は、1989年（平成2年）インギー鶏の形態学的特徴について、コーチン型に属するとしました。中国東南部が原産の鶏と考えられるが、南種子町に土着化する過程で、100年以上にわたる改良・淘汰によって原種と異なる固有の鶏種として確立されており、遺伝学の分野から見ても貴重であるとしている。

また県養鶏試験場の橋口尚子氏らは1997年（平成9年）特用家禽に関する研究の「インギー鶏の飼養状況及び性能調査」のなかで、インギー鶏は愛玩鑑賞の目的での飼養が多いが、家禽としての考察として、現在の実用ブロイラーと比較して体重は少なく、個体間のバラツキが大きく産卵率も低い、給与資料の確立や光線管理等、飼養技術の改善や体重選抜により能力改善が期待できるとしている。

② 歴史的背景

1894年（明治27年）4月25日、南種子町下中の前之浜に塩焚きにやっていた羽生嘉助が夜も更けた午後11時頃、沖合いに救助用の花火を打ち上げ、明るいランプを照らす船を見つけた。それは浜のすぐ近くにやってくる、花火に照らされた船は4本のマストがそびえて見えたという。これが東シナ海から東に向け太平洋を航海中だった英国船「ドラメルタン号」であった。



座礁した「ドラメルタン号」

驚いた嘉助はすぐさま集落に走って帰り、公民館にあったホラ貝を吹き鳴らして村人を集めた。羽生太平・才川仁市・中里峯助の若者3人が泳いで確かめに行くと、船には「金髪で天狗のような鼻、真っ赤な顔の船員29人がおり、助けを求めた。29人をいっぺんに泊める場所がなかったので、才川周右衛門・周助・周太郎・上妻覚蔵・才蔵の家に分散して泊めた。その内16名は5月3日に長崎英国領事館に護送されたが、コーウェル船長以下13名は島に残ったという。その後、ドラメルタン号が救助され、英国東洋艦隊6隻と共に6月16日に前之浜を離れるが、別れに際し、「村人の感謝の気持ちをあらわしたい」とコーウェル船長から船内に飼っていた鶏11羽が贈られた。それが今飼われている「インギー鶏」の先祖たちである。冷蔵庫のないこの時代、長期間にわたる外洋航路の船にとって、食料補給は一番の問題であった。帆船はその甲板の上に鶏小屋や豚小屋を設置しており、港に立ち寄るごとに多くの食料や鶏などを買い込んで、飼育しながら航海していたのである。

ドラメルタン号が中国に寄港したという記録があることから、おそらくインギー鶏も中国東南部の港に立ち寄った時に、買い込んだものものではないかと推測される。

また、インギー鶏の名前の由来は「イギリス人の置き土産の鶏」であるということだが、これは、村人が船員たちと接していく中で自然と生まれた呼び名であろう。例えば、人の名前を呼ぶのに保であれば「タンモー」、友則であれば「トンモー」、なぎさであれば「ナンギー」と呼ぶように、イングリッシュあるいはイングランドを「インギー」と呼んだのではないだろうか？

ところで、インギー鶏を初めて見た人は、「尾っぽがなか」「まるか太か鶏なあ」と言い合ったという。「インギー鶏を村人に11羽、贈った」と伝えられているものの、実際、誰と誰がその11羽をもらったのか、はっきりしていない。ただ、第2次大戦前に真所集落では在来地鶏と同じようにインギー鶏を飼っていたというから地元で

は「珍しい鶏」という感覚はなく、普通の家禽として飼育していたようである。しかし、戦争中から戦後にかけての食糧難の中、インギー鶏は絶滅の危機に瀕したという。現在、歴史の証人として血を絶やさずにいる鶏の元祖は、祖父「寺内弥助」が真所の人から譲り受け、父「弥六」、そして息子の「昭徳」と守りつがれたものである。

太平洋戦争で米軍の空襲が種子島でもあり、祖母「シオ」と馬が機関銃で撃たれ死亡した。その祖母が、「イギリス人からもらった大事な鶏だから大切にしなければいけない」といつも言っていたそうだ。父「弥六」は兵役で不在で、弟たちは集団疎開で鹿児島本土に行っており、鶏や馬の管理は当時13～4歳だった長男の昭徳少年であった。他の鶏は放し飼いにしており、野菜畑に入らないように畑を竹垣で囲っていたが、父「弥六」がインギー鶏は雑種にならないように分けて飼っていた。

③ 保存会等の取り組み

インギー鶏は、戦前までは在来地鶏と同様に家禽として普通に飼われていたが、戦中戦後の食糧難の中、絶滅の危機に瀕したが、唯一、下中里集落の寺内家で10羽程が飼育されていたことで絶滅が免れた。寺内家では、代々「このインギー鶏はイギリス人からもらった大事な鶏だから大切にしなければいけない」と受け継がれてきた。



昭和50年頃の保存会メンバー

また、インギー鶏の学術的な価値を見出した鹿大の橋口先生からの強い要望もあり、昭徳を中心とするインギー鶏の愛好者が集まり、昭和50年頃、保存会の組織がつけられた。当時は特別な活動はなかったが、橋口先生が来町した時にそれぞれのインギー鶏を持ち寄って学習会などを行なった。

インギー鶏が学術的に貴重な鶏であることが知られるようになると、新聞やテレビ等の取材を受けることが多くなった。例えば、昭和50年には、天才バカボンで有名な漫画家「赤塚不二夫」氏のNHKの番組「スポットライト・インギー鶏の末裔」で、父～息子～孫への3代で伝承飼育されているのが紹介された。

また、昭和50年代以降、郷土教育の一環として学校教育の場でも積極的に取り上げられるようになり、昭和56年には地元の花峰小学校が寺内昭徳氏からインギー鶏を譲り受け、昭和58年、初めてのヒナがかえった時には、子供たちが大喜びしたそうである。

以来32年間、現在も児童が毎日交替で大切に育てている。そして、こうした保存活動が評価され、平成4年9月14日、町の文化財に指定された。同時に、南種子町インギー鳥育種会という正式な保存会も発足した。以後20年にわたって、育種会による精力的な種の保存活動がなされている。

同時に花峰小学校でも、様々な活動が行われた。

平成5年（1993）には、インギー鶏の鶏舎も新しく建て替えられ、飼育の環境も改善された。



毎日、飼育を欠かさない児童たち

平成6年には、ドラメルタン号漂着とインギー鶏渡来100周年を祝う行事が開催され、花峰小学校の児童による「ドラメルタン号の船員と住民の交流」を描いた紙芝居を披露した。

また、平成10年には英国祭98「トンミーフェスティバル」が開催され、花峰小学校の児童らによる

「ドラメルタン号とインギー鶏の物語」の劇を披露するなど、積極的に行事にも参加している。このフェスティバルでは、テーマソングの作詞にも挑戦し、かの有名な作曲家の山本直純さんの作曲で「夢の船ドラメルタン～インギー鶏の歌」というす



英国祭で劇を披露する児童たち

ばらしいテーマソングも完成した。花峰小学校では、今でも大切に歌い継がれている。さらに、ドラメルタン号の母港がイギリスのリバプールであることから、リバプール出身のビートルズの「ポール・マッカートニー」に来てもらおうと、花峰小学校の児童たちが手紙を送ったが実現はしなかった。

平成20年からは、毎年4月25日には、「インギー集会」と称して、児童がインギー鶏やドラメルタン号の歴史を紹介したり、作文を発表したりして、伝統を守り受け継ぐ大切さを学んでいる。また、毎朝、暗唱している「下中郷土カルタ」や「花峰小学校の自慢」の中にもインギー鶏のことが書かれている。

また、今年4月8日、花峰小学校の体育館において、インギー鶏の入学式？ならぬ入校式が開催された。今年は新入生がいないという寂しさもあって、インギー鶏のひ

よこを新入生に見立てて、入校式を開催したそう。出席者40名見守る中、児童と同じ数の8羽のかわいい新入生が入場すると、会場はあたたかい拍手の渦に包まれた。

さて、育種会では、寺内昭徳氏を会長に、長年、インギー鶏の種の保存活動を行ってきましたが、会員の高齢化に伴い、昨年（平成24年）10月、新たに会員を募り組織強化を図った。また名称もインギー鳥からインギー鶏とし、「南種子町インギー鶏育種会」と改名した。現在12名の会員で、インギー鶏の種の保存・保護活動に努めている。

インギー鶏の一般公開として、年1回「品評会」を開催しており、今年は、2月24日、町の生涯学習大会に併せて開催し、たくさんの来場者が集まり賑わった。品評会では、育種会員自慢の愛鶏14羽が出品され、寺内昭徳審査委員長がインギー鶏の特徴について説明された後、審査が行われた。審査の結果、花峰小学校のインギー鶏がみごとグランプリに輝いた。



品評会の審査風景

さらに、2月27日には会員の鶏舎をまわり、育種会顧問の寺内昭徳氏によるインギー鶏の認定審査を行い、88羽が認定された。認定されたインギー鶏は、足環をつけて台帳登録し、管理を行いながら種の保存に努めている。

④ まとめ

このインギー鶏が平成4年の町指定から21年という長い期間を経て今回、県の文化財に指定された背景には、インギー鶏自体の学術的価値はもとより、それに加えてイギリス人と島民との心温まる歴史的背景、さらには寺内昭徳氏をはじめとする熱心な地域の育種会による種の保存に向けた取り組みや花峰小学校の32年にも及ぶインギー鶏の飼育を通した郷土教育等の評価が認められたことにあると思う。私たちは、この大切な町の財産を永く後世へ残していくため、若い世代の後継者の育成に努めていきたいと思う。